

【花山天皇】(2)

「さて土御門より東^{ひんがし}ざまに率¹て出だしまゐらせたまふに、晴明^{せいめい}が家の前をわたらせたまへば、みづからの声にて、手をおびたたしく、はたはたと打^Aつなる。「帝おりさせたまふと見ゆる天変ありつるが、すでになりけりと見ゆるかな。参りて奏せむ。車に装束せよ」と言ふ声を聞かせたまひけむ、さりとあはれにおぼしめしけむかし。」かつがつ、式神^{しきじん}一人、内裏^{だいり}へ参れ」と申しければ、目には見えぬ物の、戸を押し開けて、御後³ろをや見まゐらせけむ、「ただ今これより過ぎさせおはしますめり」と答^いへけるとかや。その家、土御門町口なれば、御道なりけり。

花山寺におはしましつきて、御^みぐしおろしたまひて後にぞ、栗田殿は、「まかり出でて、大臣^{おとど}（兼家）にも、かはらぬ姿、今一度見え、かくと案内^{あない}申して、必ず参りはべらむ」と申したまひければ、「朕⁴をばはかるなりけり」とてこそ泣かせたまひけれ。あはれに悲しきことなりな。日ごろ、よく「御弟子にてさぶらはむ」と、契りすかし申したまひけむがおそろしさよ。

東三条殿は、もしさる事⁵やしたまふと、あやふさに、さるべくおとなしき人々、何がしかがしといふいみじき源氏の武者^{むさ}たちをぞ、送りに添へられたりける。京のほどは隠れて、堤^{つみ}のわたりよりぞうち出でまゐりける。寺などには、もしおし人などやなし奉るとて、一尺ばかりの刀どもを抜きかけてぞ守り申しけるとぞ」

〔注〕○土御門——上東門（大内裏の東面にある門の一つ）。○晴明——安倍晴明（九二一—一〇〇五）。陰陽家として朝廷に仕え、天文博士などをつとめた。家は土御門通と西洞院通の角にあったという。○式神——陰陽師が使役する鬼神。○何がしかがしといふいみじき源氏の武者——何某^{だれそれ}という剛勇な源氏の武士。源満仲・頼光など。○堤のわたり——鴨川の堤。鴨川は平安京の東を流れる。

【語彙・文法】（○Ⅱ語彙・●Ⅱ文法・☆Ⅱ常識。ただし重なるところも）

- 率る ○おびたし ●打つなる ○成る ○奏す ○さりともし ○かつがつ ☆物
●めり ○いらふ ☆御髪おろす ☆かはらぬ姿 ○見ゆ（Ⅱ見す） ○案内 ○はかる
○さぶらふ (k) ○すかす ○さるべし ○おとなし

【問い】

- ① 点線部1「率て出だしまゐらせたまふ」の主語は誰か。

- ② 二重傍線部A「なる」・B「めり」を文法的に説明せよ。

A

B

- ③ 点線部2「さりともしあはれにおぼしめしけむかし」とはどういうことか、事情がよくわかるように説明せよ。

- ④ 点線部3を品詞分解して現代語訳せよ。

御 後 ろ を や 見 ま る ら せ け む

- ⑤ 点線部4「朕をばはかるなりけり」とはどういうことか。

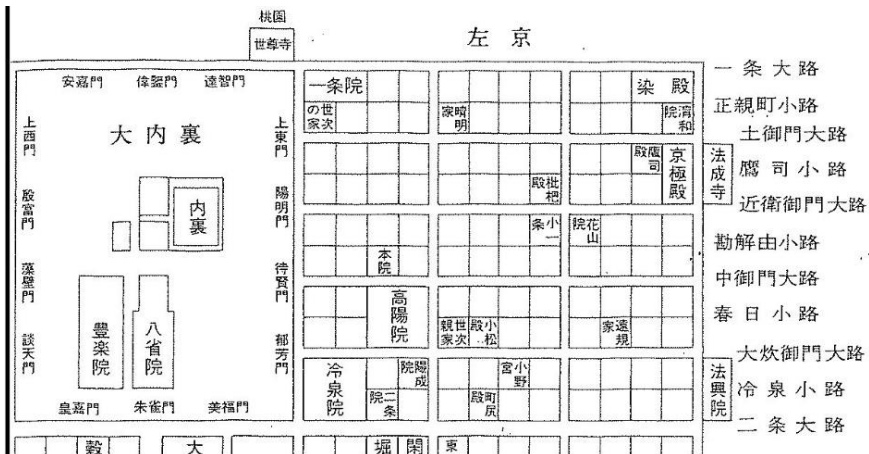
- ⑥ 点線部5「もしさる事やしたまふ」とはどういうことか。

【現代語訳】

そうして土御門から（大内裏の外へ）東向きに（道兼が帝を）連れ出し申し上げなさる途中で、安倍晴明の家の前をお通りになったところ、（晴明）自身の声がして、手を騒がしく、ばんばんと打つのが聞こえる。（晴明が）「帝が退位されるという天文の異変があったが、すでに現実になってしまったと見えるぞ。参内して奏上しよう。車に支度をせよ」と言う声を（帝は）お聞きになったであろう、（帝は）そうは言っても（覚悟の上のご出家ではあるが）お胸に刺さるものとお思いになっただろうな。（晴明が）「取り急ぎ、式神一人、内裏へ参れ」と申したところ、目には見えない何ものかが戸を押し開けて、（帝の）お後ろ姿を見申し上げたのだろうか、「たった今、ここをお通り過ぎなさったようです」と答えたとか。晴明の家は土御門通りに面した角にあったので、（帝が花山寺に向かう）お通り道であったのだ。

（帝が）花山寺にご到着になって、剃髪してしまわれた後になって、栗田殿（道兼）は、「いったんここを）失礼いたしましたして、父大臣（兼家）にも出家前の姿をもう一度見せ、かくくしかじかと事情を説明してから、必ず戻ってまいります」と申し上げなさったので、（帝は）「（道兼は）私を騙っていたのであったな」といってお泣きになった。お気の毒で悲しいことだな。常日ごろから、よく（道兼は）「（帝が）出家なさったら、私は帝の）お弟子になってお仕えしましょう」と、嘘の約束を申し上げていなさったというのが、恐ろしいことよ。

東三条殿（兼家）は、もしや（道兼が）そんな事（出家）をしなさるのでは、と危惧して、それにふさわしく思慮分別のある人たちや、何とかかんとかという剛勇で知られた源氏の武者たちを、護衛にお付けになったのだった。京の区域内では隠れていて、鴨川堤のあたりから姿を現して参上した。寺などでは、もしや強引に誰かが（道兼を法師に）し申し上げるのではと思って、一尺ほどの短刀を鞘から抜きかけて（白刃を見せて）お守り申したという。



この晴明、ある時、広沢僧正の御坊にまゐりて、物申しうけたまはりけるあひだ、若僧どもの晴明にいふやう、「式神をつかひ給ふなるは、たちまちに人をばころし給ふや」といひければ、「やすくは、えころさじ。力を入れてころしてん」といふ。「さて虫などをば、すこしの事せんに、かならずころしつべし。さていくるやうをしらねば、罪をえつべければ、さやうの事よしなし」といふほどに、庭に蛙かへるのいできて、五つ六つばかりをどりて池の方さまへ行きけるを、「あれひとつ、さらば、ころし給へ。ころみん」と僧のいひければ、「罪をつくり給ふ御房かな。されども、ころみ給へば、殺してみせ奉らん」とて、葉の草をつみきりて、物をよむやうにして、蛙のかたへ投げやりければ、その草の葉の蛙のうへにかかりければ、蛙、まひらにひしげて死にたりけり。これを見て、僧どもの色かはりて、おそろしと思ひけり。家の中に人なきをりは、この式神をつかひけるにや、人もなき蒨しとみを上げおろし、門をさしなどしけり。

〔注〕○広沢僧正——寛朝かんちょう（九一六〜九九八）。宇多天皇の孫で、嵯峨の広沢にある遍照寺に住んだ。○虫——小さな動物。爬虫類や両生類も含まれる。

【参考の記】

この晴明が、ある時、広沢僧正の僧坊に参上して、物を申したりお聞きしたり（親しくお話し合いを）していたときに、若い僧たちが晴明に言うには、「あなたは式神をお使いになるようですが、（式神を使って）すぐさま人をお殺しになることができますか」と言ったので、（晴明は）「簡単には殺せないでしょう。力を入れてやれば殺せるでしょう」と答えた。（晴明が）「そうして虫などなら、少しの事をしましたら、必ず殺してしまえます。しかし生き返らせる方法は知りませんので、罪を得ることになりましょうから、そのようなことは無益です」と言っていると、庭に蛙が出てきて、五六匹ほどが跳ねて庭のほうへ行ったのを見て、「あれを一匹、それなら殺してみてください。あなたの力を試してみたい」と僧が言ったので、「罪を作りなさるお坊さんだな。しかし、私をお試しになる以上は、殺してみせ申し上げよう」と言って、草の葉を摘み切って、何か呪文を唱えるようにして、蛙の方へ投げやったところ、その草の葉が蛙の上にかかったとみると、蛙はぺしゃんこになって死んでしまった。これを見て、僧たちは真っ青になって、恐ろしいと思った。（晴明は）家の中に使用人がいないときは、この式神を使ったのだろうか、人もいないのに蒨を上げ下ろしたり、門を閉めたりしていたという。

*『宇治拾遺物語』には他にも晴明が法師の式神を隠して屈服させる話、蔵人少将や藤原道長を他の陰陽師の呪詛から守る話があり、晴明が陰陽道の第一人者として認識されていたことがわかる。